

日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択 (1)

——許容度と選択率の観点から——

杉 村 泰

1. はじめに

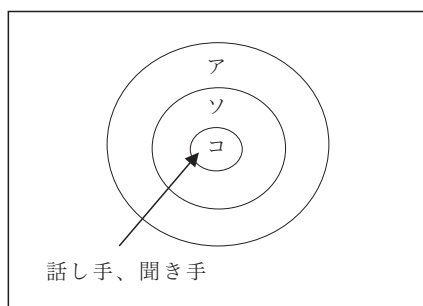
本稿は日本語の現場指示における「この」「その」「あの」の選択について、3種類のアンケート調査の結果をもとに許容度と選択率の観点から考察したものである。

日本語の指示詞（コソア）は大きく分けて次のように分類できる。

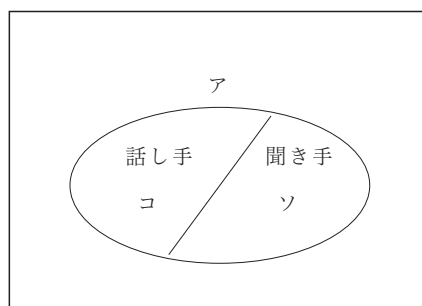
I. 現場指示（①融合型、②対立型）

II. 非現場指示（③文脈指示、④記憶指示）

現場指示（融合型、対立型）は話し手または聞き手の眼前にある指示物（音やにおいも含む）を指す用法で、非現場指示は会話や文章の中に現れる指示物を指したり（文脈指示）、記憶の中にある指示物を指したり（記憶指示）する用法である。このうち、現場指示（融合型）は図Aのように話し手と聞き手が融合した立場に立つもので、両者に近いものを「コ」、両者から遠いものを「ア」、そのどちらでもないものを「ソ」で表す。一方、現場指示（対立型）は図Bのように話し手と聞き手が対立した立場に立つもので、話し手の領域に属するものを「コ」、聞き手の領域に属するものを「ソ」、そのどちらにも属さないものを「ア」で表す。



図A 現場指示（融合型）



図B 現場指示（対立型）

以上のことは先行研究ですでに指摘されていることであるが、実際に日本語話者がどのようにコソアの選択を捉えているかについてはなお検討の余地がある。そこで本稿では、言おうと思えば言えるかどうかを示す「許容度」と、実際にどれを選択するかを示す「選択率」の二つの観点から、現場指示における日本語話者の「この」「その」「あの」の選択について考察する。

2. 先行研究

日本語の指示詞に関しては、佐久間（1951）、高橋（1956）などの先駆的な研究に始まり、多くの研究がなされている。これには庵（2007）、陳（2015）など非現場指示の用法について論じたもの、迫田（2001）など学習者の習得過程について論じたもの、木村（1992）、王（2004）、単（2011）、金井他（2011）など対照研究の観点から論じたもの、張（2001）など誤用研究の観点から論じたものなどがある¹⁾。これらの多くはコソアの選択が相対的に複雑な非現場指示の解明に焦点が置かれ、コソアの選択が比較的単純な現場指示についてはあまり焦点が置かれていない。しかし、現場指示の用法も必ずしも自明のものではないため、さらなる検討が必要である。

このような中で現場指示について興味深い考察を行った研究に李（2010）がある。李（2010）は「筆者は実体験で、一緒に映画館で映画を見ている友人（日本人）が、映画の出演者を指差し「この人、誰？」というのを聞いて、なぜ映画の中の人物は物理的には遠いところにあるのに「あの」ではなく「この」という近称の指示語を使うのだろうか」と疑問に思ったことがある」（p. 178）と述べ、「本研究の目的は現場指示（特に融合型）の使用実態調査により、韓国語母語話者と日本語母語話者の指示対象の捉え方、その認識のあり方（物理的・心理的遠近感覚）を把握し、両者の共通点及び相違点を探ることで、その成果を指示語の指導に貢献できる資料としたい」（p. 178）として、表1の場面における日本語と韓国語の近称（코、이）・中称（소、그）・遠称（아、저）の選択傾向の違いについて論じている²⁾。

表1 仮説に基づいた分類基準（李 2010の表3）

現場指示の融合型				
場面の状況	問	場 面	指示対象	仮 説
目に見える指示対象	問1	6 畳の部屋	テレビ	A：実際の事物と画面の中の人物の差
	問2	6 畳の部屋	テレビの中の人物	
	問3	映画館	映画に出ている人物	B：障害物の有無の差
	問4	バス	バスの窓の外の大型スクリーンに映っている人	
	問9	タクシー	20メートルくらい離れている建物	D：動的な空間と静的な空間の差
	問10			
目に見えない指示対象	問5	友達の家	音楽	C：①回想文と推量文の差 ②推量文の中での事物の特性や種類による差
	問6	友達の家	物が割れる音	
	問7	友達の家	動物の鳴き声	
	問8	友達の家	赤ちゃんの泣き声	

これを受け、杉村（2016, 2017a-d）では例(1)のような二国会話場面を32場面設定し、中

国人日本語学習者や韓国人日本語学習者のコソアの選択について考察した。各設問には場面設定が分かりやすいように、問題文のすぐ横に下のような挿絵を付けた。李(2010)をはじめ従来の研究では話し手(第一話者(A))一人の発話しか見ていないが、杉村(2016, 2017a-d)では例(1)のようにそれを受けた聞き手(第二話者(B))の発話も見ている点で特徴がある。これにより、日本語話者と中国人・韓国人日本語学習者のコソア選択の違いを見た。

(1) 空を飛んでいる鳥を見て]

A : (この、その、あの) 鳥の名前は何ですか？

B : (この、その、あの) 鳥の名前はコンドルです。



以上、李(2010)や杉村(2016, 2017a-d)は「コ」「ソ」「ア」の三つのうちどれを選択するかという「選択率」を指標として、実際にどれを選択するかを見たものである。しかしこれとは別に、言おうと思えば言えるかどうかを見る「許容度」を指標とした観点もある。許容度はちょうど「A君」「B君」「C君」それぞれについて好きか嫌いを見るようなもので、「選択率」は「A君」「B君」「C君」のうち誰が一番好きかを見るようなものである。本稿ではこの両者を組み合わせて日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択について考察する。

3. アンケート調査の概要

本稿では、杉村(2016, 2017a-d)の場面を一部修正した表2の場面について、以下に示す①～③の三つのアンケート調査を組み合わせ考察する。なお、テスト②は第二話者(B)については調査しにくい³⁾ため、第一話者(A)についてのみ調査した。以下、三つのアンケートの概要を示す。

テスト① コソアの三者択一テスト(選択率%)

- ・これは実際にどれが選択されるかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」のうち一番適切だと思うものを一つ選択させるテストである。
- ・「コソアそれぞれの選択数÷被験者数×100=選択率」とする。
- ・被験者：名古屋大学の学生(日本語母語話者)121人(2017年4～5月に実施)

テスト② コソアそれぞれの○×テスト(許容度%)

- ・これは言おうと思えば言えるかどうかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」それぞれについて言えると思うか(○)、言えないと思うか(×)のどちらか一つを選択させるテストである。

- ・後の図の中では「(この、その、あの)」と三つ並べてあるが、実際のテストでは「A：
この鳥の名前は何ですか？」のように一つだけ提示した。
- ・「コソアそれぞれの○の数÷被験者数×100＝許容度」と見なす。
- ・被験者：名古屋大学の学生（日本語母語話者）
「この」の○×テスト 120人（2017年10月に実施）
「その」の○×テスト 124人（2017年10月に実施）
「あの」の○×テスト 125人（2017年10月に実施）

テスト③ コソアの複数選択テスト（選択率％）

- ・これも言おうと思えば言えるかどうかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」のうち言えると思うものを全て選択させるテストである。この点で②と似ているが、②はコソアのうち1つだけ見て○×を判断するのにに対し、③はコソアの三つを比較しながら判

表2 32場面の指示対象と分類基準（網掛けは本稿の考察対象）

指示対象		分類基準
視覚	上空を飛ぶ鳥 夜空の星	上空遠くの事物 (空をスクリーンに見立てる)
	遠くを歩く犬 近くを歩く犬	話し手や聞き手からの距離（遠近） ・話し手や聞き手に接していない
	第二話者の抱く子供 第一話者の抱く子供	所持物：人間・物・身体の一部 ・話し手または聞き手に接している ・話し手の領域か聞き手の領域か
	第二話者の持つバッグ 第二話者の口の口紅	
	部屋の壁掛けテレビ 部屋のテレビ	実際の事物と画面の中の人物 ・垂直方向か水平方向か
	テレビの中の人物（2問） 映画の中の人物（2問）	・画面までの距離が近いか遠いか ・画面の人物が心理的に近いか遠いか
	直接見た大型スクリーンの人物 窓越しに見た大型スクリーンの人物	・障害物の有無
	第一話者の子供の写真（2問） 第二話者の子供の写真（2問） 担任の先生の写真（2問）	写真の中の人物 ・第一話者の子供か第二話者の子供か ・子供のことか先生のことか ・現在のことか過去のことか
聴覚	音楽（窓の外の演奏者）未知	・音源が見えるかどうか ・音源が第二話者の側にあるかどうか ・その音が未知のものか既知のものか
	音楽（音のみ）未知、既知	
	音楽（隣に演奏者がいる）未知、既知	
嗅覚	におい（窓の外の演奏者）未知	・においの発生源が見えるかどうか ・発生源が第二話者の側にあるかどうか ・そのにおいが未知のものか既知のものか
	におい（音のみ）未知、既知	
	におい（隣に演奏者がいる）未知、既知	

断する点で違いがある。

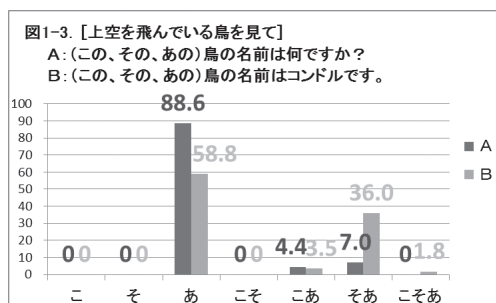
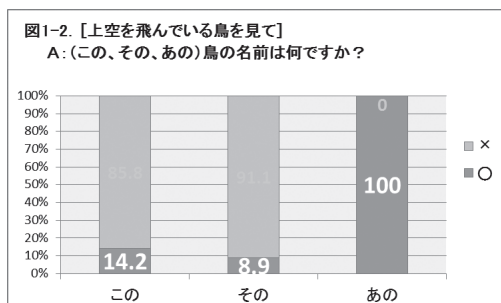
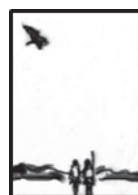
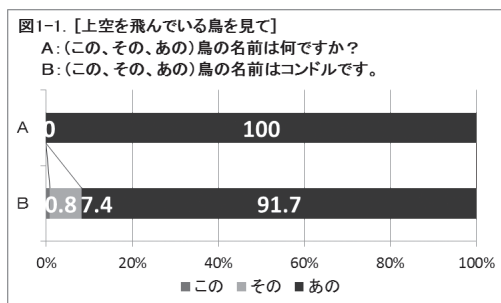
- ・「コのみ」「ソのみ」「アのみ」「コとソ」「コとア」「ソとア」「コソア全て」について、
「それぞれの選択数÷被験者数×100＝選択率」として計算する。
- ・被験者：名古屋大学の学生（日本語母語話者）114人（2017年6月に実施）

4. 調査結果

本稿では3節の表2で示した32場面のうち、網掛けをした10の場面（以下の図1～10）について論じる。このうち、図1～10-1はテスト①の選択率を示したものの、図1～10-2はテスト②の許容度を示したものの、図1～10-3はテスト③の選択率を示したもので、それぞれ「A」は第一話者、「B」は第二話者を表す。以下、4.1では「指示対象が遥か遠くにある場合」、4.2では「指示対象が話し手から離れている場合」、4.3では「指示対象が話し手に接している場合」、4.4では「指示対象が話し手の所有物の場合」、4.5では「音やにおいの場合」について論じる。このうち4.1と4.2は融合型の場面で、4.3～4.5は融合型にも対立型にもなりうる場面である。

4.1. 指示対象が遥か遠くにある場合

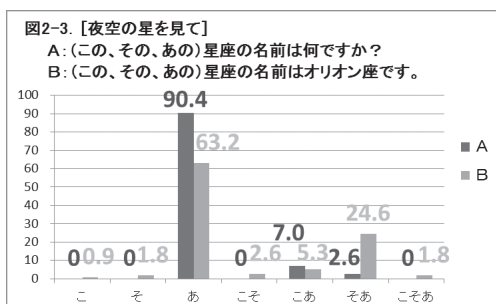
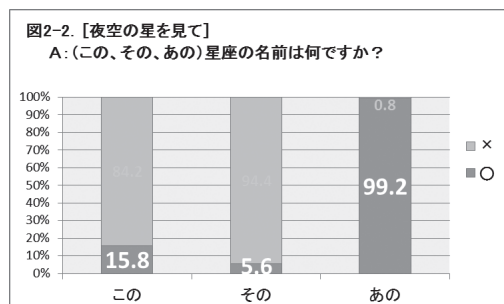
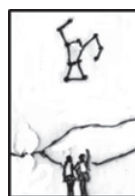
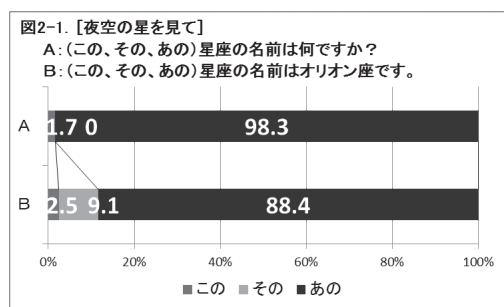
まず、図1の「上空を飛ぶ鳥」の場合、指示対象が遠くにあるため、第一話者の100%が遠称の「あの」を選択している（図1-1）。一方、コソアそれぞれの許容度を見ると、近称の「こ



の」は14.2%、中称の「その」は8.9%で、遠称の「あの」が100%と圧倒的に高い（図1-2）。また、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」が88.6%と圧倒的に高い（図1-3）。このように指示対象が遠くにある場合、第一話者はわずかに「この」や「その」も許容するものの、圧倒的に「あの」の許容度が高く、実際に「あの」が選択されている⁴⁾。

一方、第二話者は「あの」の選択率が91.7%と高いが、「その」も7.4%選択されている（図1-1）。また、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」が58.8%と最も高いものの、「ソとア」も36.0%と約三分の一を占めている（図1-3）。指示対象が遠くにある場合、第二話者も「あの」の許容度や選択率が高いが、「その」もある程度許容され、選択される。第二話者の場合、現場指示として「あの」を使うだけでなく、第一話者の発話を受けて「あなたの言うその鳥」という意味で文脈指示の「その」を使うこともできる。しかし、「あの」の選択率が圧倒的に高いことから、文脈指示よりも現場指示に傾きやすいことが分かる。

次の図2の「夜空の星」の場合も、「上空を飛ぶ鳥」と似た許容度や選択率を見せている（図2-1～図2-3）。



4.2. 指示対象が話し手から離れている場合

次に、図3の「遠くを歩く犬」と図4の「近くを歩く犬」を比較する。「遠くを歩く犬」の場合、「上空を飛ぶ鳥」や「夜空の星」と似た許容度や選択率を見せている（図3-1～図3-3）。ただし、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は5.0%、「その」は15.3%で、先の二つとは逆に「その」の許容度の方が高くなっている（図3-2）。これは「上空を飛ぶ鳥」や「夜

図3-1. [遠くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

B: (この、その、あの)犬の名前はプードルです。

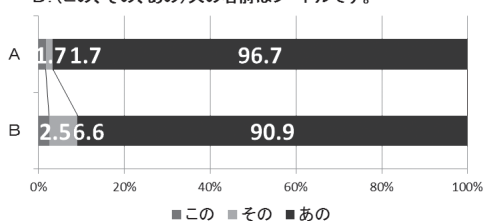


図3-2. [遠くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

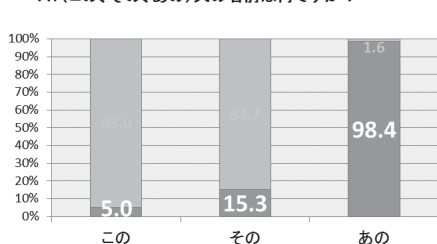


図3-3. [遠くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

B: (この、その、あの)犬の名前はプードルです。

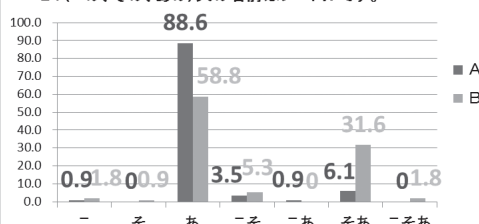


図4-1. [近くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

B: (この、その、あの)犬の名前はプードルです。

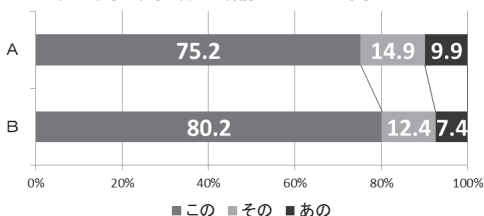


図4-2. [近くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

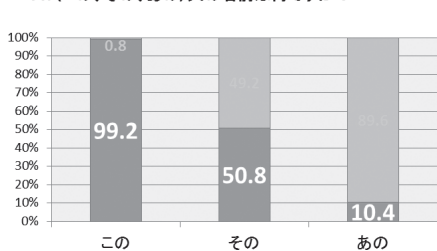
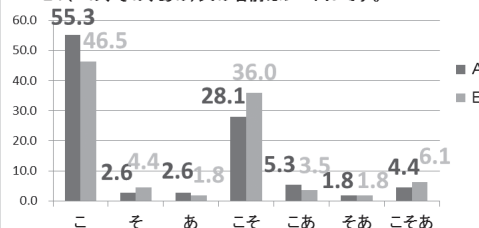


図4-3. [近くを歩いている犬を見て]

A: (この、その、あの)犬の名前は何ですか？

B: (この、その、あの)犬の名前はプードルです。



空の星」のように遥か遠くの指示対象に比べ、「遠くを歩く犬」のように少し遠いだけの指示対象だと相対的に中距離の「ソ」をイメージしやすいためであると考えられる⁵⁾。

これに対し、図4の「近くを歩く犬」の場合、指示対象が二人の足元近くにいるため、第

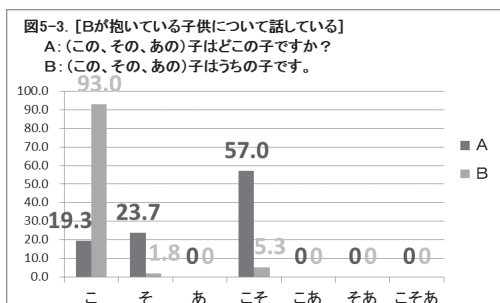
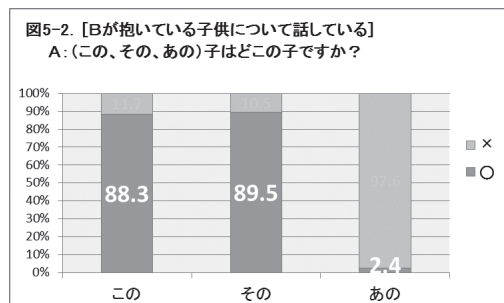
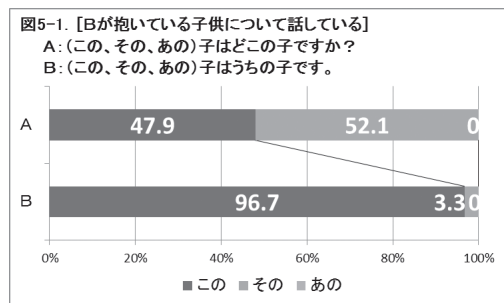
一話者は「この」の選択率が75.2%と最も高く、「その」が14.9%、「あの」が9.9%の順になっている（図4-1）。一方、コソアそれぞれの許容度も、「この」が99.2%、「その」が50.8%、「あの」が10.4%という順になっている（図4-2）。また、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が55.3%で「コとソ」が28.1%となっている（図4-3）。このように指示対象が話し手の近くにある場合、第一話者は「この」の許容度が最も高く、「この」を選択しやすいが、「その」や「あの」の許容度もある程度あり、その程度に応じて「その」や「あの」も選択される。これは指示対象が近くにあるといっても話し手の目の前にあるわけではなく、人によって距離感が異なるためであると考えられる。

一方、第二話者も「この」の選択率が80.2%と最も高くなっている（図4-1）。また、コソアの複数選択を見ると、第一話者と同様に「コのみ」が46.5%で「コとソ」が36.0%という順になっているが、第一話者に比べてその差が小さくなっている（図4-3）。そのため、第二話者の方が「その」を許容しやすく思われるが、実際の選択率は第一話者も第二話者もさほど変わらない。これについては、当面事実の指摘にとどめておく。

4.3. 指示対象が話し手に接している場合

次に、図5の「第二話者（B）の抱く子供」と図6の「第一話者（A）の抱く子供」を比較する。この場合、話し手はその状況を「現場指示（融合型）」とも「現場指示（対立型）」とも捉えられるため、どちらのイメージに傾きやすいかが問題となる。

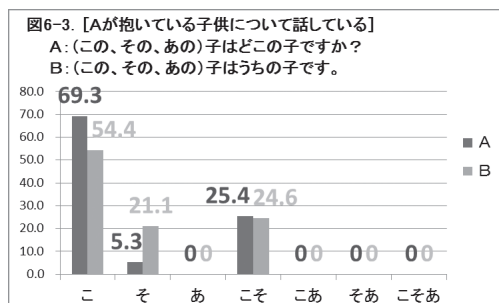
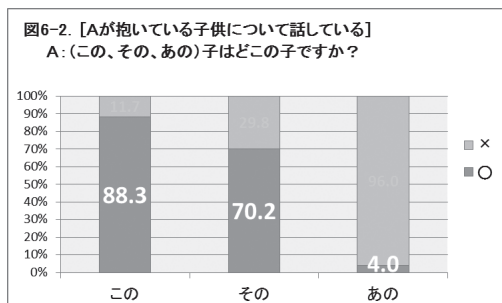
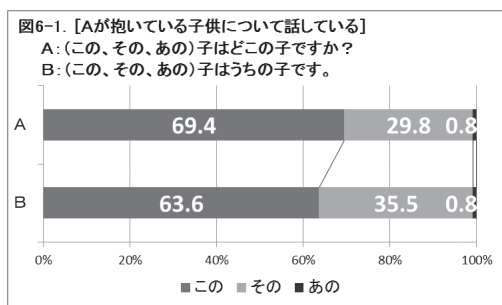
まず、図5の「第二話者（B）の抱く子供」の場合、第一話者は融合型で捉えれば指示対象



が近くにあることを表す「この」を選択し、対立型で捉えれば相手領域を表す「その」を選択することになる。ここで選択率を見ると、「この」が47.9%、「その」が52.1%で、ほぼ半々になっている（図5-1）。次にコソアそれぞれの許容度を見ると、「この」と「その」がともに90%弱と同じぐらい高い許容度になっている（図5-2）。さらにコソアの複数選択を見ると、「コのみ」が19.3%、「ソのみ」が23.7%、「コとソ」が57.0%となっており、人によって融合型に傾く人、対立型に傾く人、どちらも同じぐらい許容する人に分かれるが、全体的に「コ」と「ソ」の許容性はほぼ同じになっている（図5-3）。このことから、指示対象が第二話者の手元にある場合、第一話者は融合型・対立型のどちらもほぼ同じ程度に捉えられることが分かる。

一方、第二話者は「この」の選択率が96.7%と高く（図5-1）、コソアの複数選択でも「コのみ」が93.0%と高くなっている（図5-3）。これは第二話者の場合、融合型で捉えても指示対象が近くにあることを表す「この」を選択し、対立型で捉えても自分領域を表す「この」を選択するためである。この場合、融合型と対立型の区別は付けにくい、相手の発話が「コ」なら融合型で応答し、「ソ」なら対立型で応答していると考えられる。

次に、図6の「第一話者（A）の抱く子供」の場合について見る。この場合、第一話者は、上の第二話者と同じように話し手自身が自分で子供を抱いている。しかし、上の第二話者は96.7%の人が「この」を選択している（図5-1）のに対し、こちらの第一話者は69.4%しか「この」を選択しておらず、29.8%の人は「その」を選択している（図6-1）という違いがある⁶⁾。次にコソアそれぞれの許容度を見ると、「この」が88.3%で最も高いが、「その」も70.2%でそ



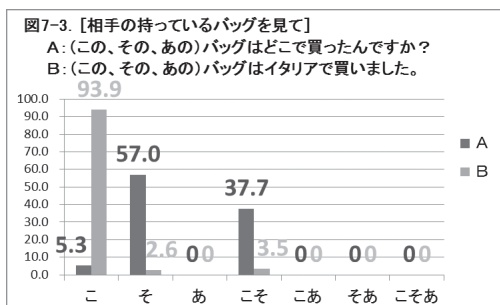
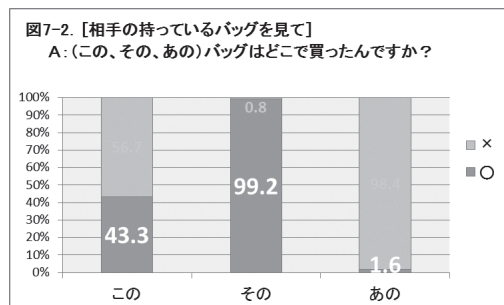
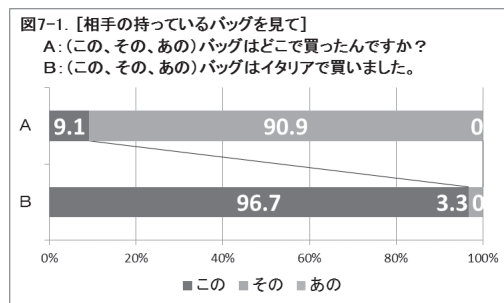
れなりに高くなっている（図6-2）。さらにコソアの複数選択を見ると、これも「コのみ」が69.3%と最も高いが、「コとソ」を選んだ人も25.4%と四分の一ほどいる（図6-3）。この場合、第一話者は指示対象を自分に近い存在であると捉えれば「この」を選択し（融合型の可能性も対立型の可能性もある）、自分とは別人格の少し離れた存在と捉えれば「その」を選択する（融合型）と考えられる。ただし、「この」のイメージの方が強いようである。

一方、第二話者は「この」の選択率が63.6%で、「その」の選択率が35.5%で、第一話者と似たような割合になっている（図6-1）。しかし、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が54.4%、「ソのみ」が21.1%、「コとソ」が24.6%というように、第一話者に比べて「ソのみ」の割合が高くなっている（図6-3）。この場合、第二話者は指示対象である子供を自分に近い存在であると捉えれば「この」（融合型）を選択し、相手領域に存在すると捉えれば「その」（対立型）を選択することになる。コソアの複数選択において第一話者に比べて「ソのみ」の割合が高いことから、第二話者の方がこの状況を対立型としてイメージしやすいことが分かる。

4.4. 指示対象が話し手の所有物の場合

次に、図7の「相手の持つバッグ」と図8の「相手の口の口紅」の場合について見る。この場合も話し手はその状況を「現場指示（融合型）」とも「現場指示（対立型）」とも捉えられるため、どちらのイメージに傾きやすいかが問題となる。

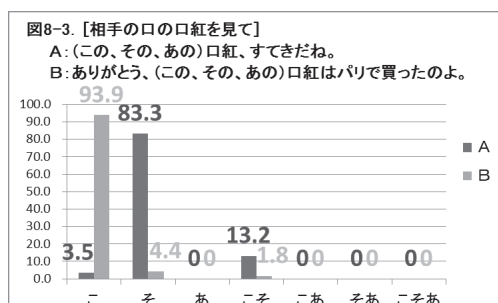
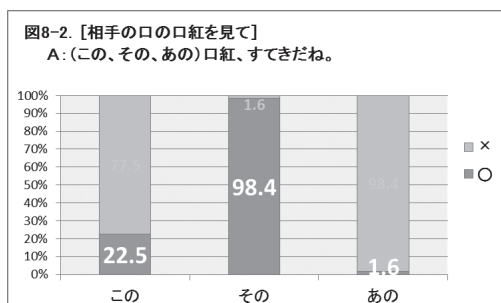
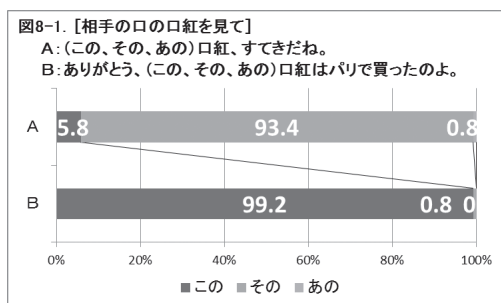
まず、図7の「相手の持つバッグ」の場合、第一話者は融合型で捉えれば「この」を選択



し、対立型で捉えれば「その」を選択することになる。ここで選択率を見ると、「この」が9.1%、「その」が90.9%で、対立型を選択している人が9割を占めている（図7-1）。次にコソアそれぞれの許容度を見ると、「その」が99.2%でほぼ全員が対立型として捉えられるとしている一方で、「この」も43.3%と半数弱の人が融合型でも捉えられるとしている（図7-2）。さらにコソアの複数選択を見ると、「コのみ」が5.3%、「ソのみ」が57.0%、「コとソ」が37.7%となっており、ほとんどの人が対立型を許容する一方で、半数弱の人が融合型も許容している（図7-3）。このことから、第二話者の手元にある指示対象が「物」の場合、第一話者は融合型とも対立型とも捉える可能性があるが、対立型のイメージの方が2倍以上強く、実際に選択する場合は対立型の「その」に大きく偏ることが分かる。この点で先の「子供」の場合とは違いがある。これは有情物である子供に比べて無情物であるバッグの方が相手の所持物として認識されやすいためであると考えられる。もちろん「この」を使って融合型で言うこともできるが、相手との人間関係が近くないと少し馴れ馴れしい感じがする⁷⁾。

一方、第二話者は「この」の選択率が96.7%と高く（図7-1）、コソアの複数選択でも「コのみ」が93.9%と高い（図7-3）。これは第二話者の場合、先の子供の場合と同様に、融合型で捉えても対立型で捉えても「この」を選択することになるためである。

次に、図8の「相手の口の口紅」の場合について見る⁸⁾。この場合も第一話者の選択率は「この」が5.8%、「その」が93.4%で、バッグの場合と同様に対立型に大きく傾いている（図8-1）。しかし、コソアそれぞれの許容度を見ると、「その」は98.4%とバッグの場合と同じぐらい高いが、「この」は22.5%とバッグの場合の半分ほどしかない（図8-2）。さらにコソアの



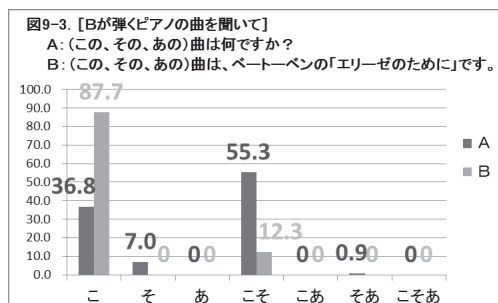
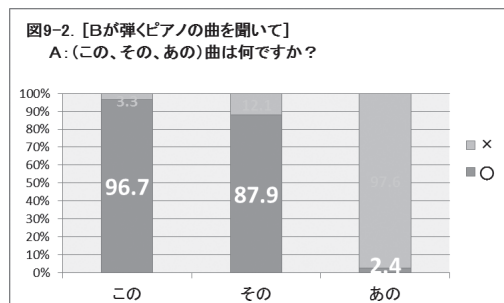
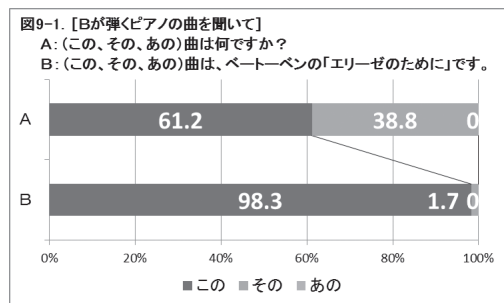
複数選択を見ると、「コのみ」が3.5%、「ソのみ」が83.3%、「コとソ」が13.2%となっており、バッグの場合に比べて「ソのみ」の割合がずっと高くなっている（図8-3）。このことから、話し手の心の中では相対的に口紅の方が対立型のイメージが強いことが分かる。これはバッグは相手とは別の分離可能所有物であるのに対し、口紅は相手の口と一体化した分離不可能所有物であり、相対的に相手領域として認知されやすいためであると考えられる⁹⁾。もちろん「この」を使って融合型で言うこともできるが、相手との人間関係が近くないとバッグ以上に相手に馴れ馴れしい感じを与えてしまう¹⁰⁾。

一方、第二話者は「この」の選択率が99.2%と高く（図8-1）、コソアの複数選択でも「コのみ」が93.9%と高い（図8-3）。第二話者の場合、先の子供やバッグの場合と同様に、融合型で捉えても対立型で捉えても「この」を選択することになる。

4.5. 音やにおいの場合

次に、図9の「相手の弾く曲」と図10の「相手の作るカレーのにおい」の場合について見る。この場合も話し手はその状況を「現場指示（融合型）」とも「現場指示（対立型）」とも捉えられるため、どちらのイメージに傾きやすいかが問題となる。

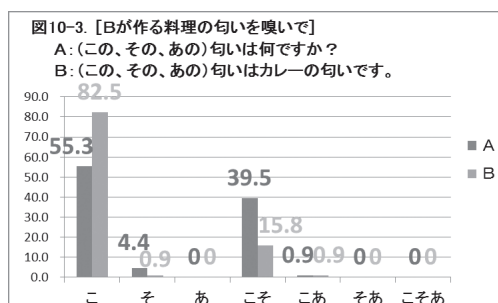
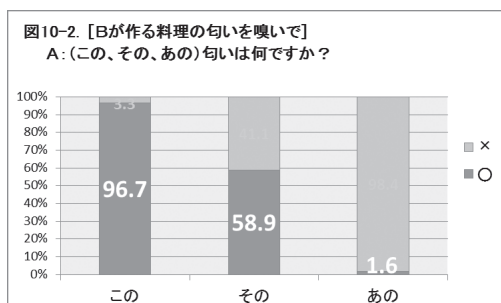
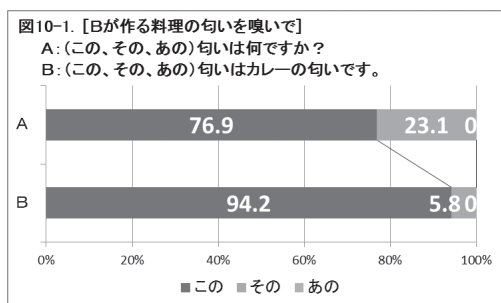
まず、図9の「相手の弾く曲」の場合、第一話者は融合型で捉えれば「この」を選択し、対立型で捉えれば「その」を選択することになる。ここで選択率を見ると、「この」が61.2%、「その」が38.8%で、融合型と対立型の比率はおおよそ6対4となっている（図9-1）。次にコソアそれぞれの許容度を見ると、「この」が96.7%、「その」が87.9%でどちらも高いが、「この」



の方がやや高くなっている (図9-2)。さらにコソアの複数選択を見ると、「コのみ」が36.8%、「ソのみ」が7.0%、「コとソ」が55.3%となっており、融合型のみまたは融合型と対立型の両方で捉える人に比べ、対立型のみで捉える人はかなり少ないことが分かる (図9-3)。このことから、指示対象が相手の弾く曲の場合は、子供やバッグや口紅の場合に比べて対立型のイメージが弱いことが分かる。これは相手の所持物というイメージが相対的に弱いためであると思われる¹¹⁾。

一方、第二話者は「この」の選択率が98.3%と高く (図9-1)、コソアの複数選択でも「コのみ」が87.7%と高い (図9-3)。第二話者の場合、先の子供やバッグや口紅や場合と同様に、融合型で捉えても対立型で捉えても「この」を選択することになる。

最後に、図10の「相手の作るカレーのにおい」の場合について見る。この場合、第一話者の選択率は「この」が76.9%、「その」が23.1%で、融合型と対立型の比率がおよそ7.5対2.5となっている (図10-1)。次にコソアそれぞれの許容度を見ると、「この」が96.7%、「その」が58.9%で、「この」の方が37.8ポイント高くなっている (図10-2)。さらにコソアの複数選択を見ると、「コのみ」が55.3%、「ソのみ」が4.4%、「コとソ」が39.5%となっており、融合型のみまたは融合型と対立型の両方で捉える人に比べ、対立型のみで捉える人はかなり少ないことが分かる (図10-3)。このように指示対象が相手の作るカレーのにおいの場合、相手の弾く曲に似ているが、相対的に「この」の許容度や選択率が高く、「その」の許容度や選択率が低くなっている。このことから、相手の作るカレーのにおいでは、相手の弾く曲に比べて対立型のイメージが弱く、相対的に相手の所持物のイメージが弱いことが分かる。



一方、第二話者は「この」の選択率が94.2%と高く（図10-1）、コソアの複数選択でも「このみ」が88.6%と高い（図10-3）。第二話者の場合、先の子供やバッグや口紅や相手の弾く曲の場合と同様に、融合型で捉えても対立型で捉えても「この」を選択することになる。

5. まとめ

以上、本稿では二者的会話場面における日本語の現場指示における「この」「その」「あの」の選択について、3種類のアンケート調査の結果をもとに許容度と選択率の観点から考察した。その結果を表3に整理する。次号では表2中の「実際の事物と画面の中の人物」について考察する予定である。

表3 許容度と選択率のまとめ

		指示対象	第一話者 (A)	第二話者 (B)
視覚	融合型	1. 上空を飛ぶ鳥	指示対象が遠くにあるため「ア」の許容度と選択率がほぼ100%となる。空をスクリーンに見立てて映画の中に入り込むように見ることもできるため「コ」の許容度も15%ほどあるが、物理的な遠さの方が優先されて「コ」の選択率はほぼ0%となる。	Aと同様に「ア」の許容度と選択率が高い。コソアの複数選択で「ソとア」を選ぶ人も3分の1から4分の1ほどおり、「ソ」の選択率も10%弱ほどある。これは「あなたの言うその指示物」という意味で文脈指示の「ソ」が使われていると考えられる。
		2. 夜空の星		
		3. 遠くを歩く犬	上と同様に「ア」の許容度も選択率もほぼ100%となる。「コ」の許容度は5%ほどしかない。	
		4. 近くを歩く犬	指示対象が近くにあるため「コ」の許容度や選択率が高いが、人によって距離感が異なるため、「ソ」や「ア」もある程度許容・選択される。	
	融合型・対立型	5. Bが抱く子供	融合型で捉えれば「コ」、対立型で捉えれば「ソ」を選択する。「コ」も「ソ」も許容度が90%ほどあり、両者の選択率はほぼ5:5となっている。	融合型で捉えても対立型で捉えても「コ」を選択する。(融合型と対立型の区別は付けにくいだが、相手の発話が「コ」なら融合型、「ソ」なら対立型で応答していると考えられる。)
		6. Aが抱く子供	5のBに似た位置関係だが、「コ」の許容度が90%ほどあるだけでなく、「ソ」の許容度も70%ほどあり、両者の選択率はほぼ7:3となっている。	
		7. Bの持つバッグ	「ソ」の許容度はほぼ100%、選択率は約90%であり、対立型で捉えやすい。「コ」を使って融合型で言えなくもないが、親しい関係でないと思われしく感じる。	

	8. Bの口の口紅	口紅（唇）は身体部位であるため、上のバッグ以上に対立型で捉えやすい。
聴覚	9. Bの弾く曲	許容度も選択率も「ソ」より「コ」の方が幾分高く、対立型より融合型で捉える方が優勢である。
嗅覚	10. Bの作るカレーのにおい	9の音に比べると「ソ」の許容度や選択率が低くなり、融合型で捉える方がより優勢になる。

付記：本稿は平成28-32年度科学研究費基金（基盤研究(C)）「中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号16K02809）による研究成果の一部である。

注

- 1) 指示詞の研究史に関しては森塚（2003）に詳細な記述がある。
- 2) 李（2010）の問題点については杉村（2017b）で論じている。
- 3) テスト①や③に比べてテスト②は、第一話者における回答の影響が第二話者に出やすく、第一話者がコを使った場合、ソを使った場合、アを使った場合に分けて調査しなければならず、アンケートが煩雑になるためである。
- 4) 単（2011）は、中国語ではこのような場面で“这”（英語の this に相当）も“那”（同 that に相当）も使えることを指摘している。これについて単（2011）は、「这の使用は、指示対象が現場から抽象化され、指示対象のワシへの強い関心度を示しており、物理的な要素（遠という物理的距離）よりも談話的な要素が優先された結果である」（p. 130）と説明している。しかし、談話的な要素というのは分かりにくいので、空全体を大きなスクリーンに見立て、まるで映画のストーリーの中に入り込むようにして、指示対象を心理的に近く捉えていると説明したほうが分かりやすい。この場合、心理的に指示対象に近づいた現場指示とも考えられるし、ストーリーの中で指示対象を指した文脈指示とも考えられる。
- 5) 「上空を飛ぶ鳥」や「夜空の星」の場合に「コ」の許容度が15%ほどあるのは、話し手の意識としては、日本語でも中国語と同様に指示対象を心理的に近く捉える人がいることを示している。しかし、実際に選択する際は物理的な遠さの方が優先されるようである。
- 6) 筆者（日本語母語話者）の語感では「この」しか使えないが、人によって捉え方が違うようである。
- 7) 相手のバッグに触ったり近くで指をさしたりして言えば、相手のバッグも話し手の領域に入るため「この」が使えるようになる。
- 8) 張（2001）は中国人に「あなたの＊この（→その）口紅、すてきね」という誤用が見られることを指摘して、「相手の近くにおいて日本語ならば普通「そ」しか使えないものも、腕を伸ばして指して言えば、中国語では次の例（4）（引用者注：“这包是外国货把。”（そのかばん、外国製でしょう。））のように「这」でも構いません」（p. 5）と述べ、「この発想で学習者はタイトルである「あなたのこの口紅、すてきね」のような言い方を口にしてしまうのです」（p. 6）と論じている。
- 9) 角田（1991）は分離不可能所有と分離可能所有の違いに着目し、直感的に「身体部分＞属性＞衣類＞（親族）＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物」という傾斜（cline）があるとしている。その上で、「この所有傾斜は、所有者と所有物の間の物理的なまたは心理的な近さ・密接さの程度を表していると言える」（pp. 119-120）と述べている。
- 10) バッグの時と同様に相手の口紅（唇）に触ったり近くで指をさしたりして言えば、「この」が使えるよう

になる。しかし、身体部位に触れることは相手領域を侵害することになるため、文法的には正しくても生理的に嫌悪されかねない。口紅の場合、よほど親しい関係にあるか化粧品売り場の店員による発話でないと「この」は使いづらいと思われる。

- 11) これがもし相手の吹く口笛や相手の自作の曲だったら、相手領域のイメージが強くなり、対立型の「その」の許容度や選択率が上がるかもしれない。

引用文献

- 李賢淑 (2010) 「現場指示使用に見られる認識の差に関する韓日対照研究—現場指示の融合型を中心に—」『日語日文学』45, pp. 177-196. 大韓日語日文学會
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 王亜新 (2004) 「文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違—日文中訳作品の実例分析—」『東洋大学紀要「言語と文化」』4, pp. 83-98. 東洋大学言語文化研究所設置準備委員会
- 金井勇人、金善花、ジョセップ・プラウィタ (2011) 「日本語と諸言語の対照について—インドネシア語・韓国語・中国語と—」『国際交流センター紀要』5, pp. 17-34. 埼玉大学国際交流センター
- 木村英樹 (1992) 「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて—」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』, pp. 181-211. くろしお出版
- 佐久間鼎 (1951) 「指示の場と指す語—「人代名詞」と「こそあど」—」『現代日本語の表現と語法(改訂版)』, 厚生閣 [金水敏・田窪行則編 (1992) 『(日本語研究資料集) 指示詞』, pp. 32-34. ひつじ書房 所収]
- 迫田久美子 (2001) 「学習者独自の文法」『日本語学習者の文法習得』, pp. 3-23. 大修館書店
- 杉村泰 (2016) 「話し手と聞き手の日本語指示詞選択の違い」劉曉芳・徐曙・曹大峰(主編)『日語教育与日本学』第9輯, pp. 15-23. 華東理工大学出版社
- 杉村泰 (2017a) 「二社会話場面における日本語の指示詞コソアの選択—南国商学院でのアンケート結果—」秦明吾(主編)『21世紀新視野下的日語教学与研究』, pp. 32-44. 北京語言大学出版社
- 杉村泰 (2017b) 「二社会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較—」『日本語／日本語教育研究』[8] 2017, pp. 21-36. 日本語／日本語教育研究会, ココ出版
- 杉村泰 (2017c) 「日本語の指示詞「この」「その」「あの」の選択—画面の中の人物の場合—」『日本語文化研究』第六輯, pp. 18-23. 大連理工大学出版社
- 杉村泰 (2017d) 「二社会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語話者と韓国人上級日本語学習者の比較—」『日本語教育』第82輯, pp. 39-52. 韓国日本語教育学会
- 単娜 (2011) 「日中両言語におけるダイクシス指示表現の比較対照—認知言語学的な観点による一考察—」『東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—』18, pp. 123-133. 日中対照言語学会
- 高橋太郎 (1956) 「場面」と「場」『国語国文』25(9). 京都大学文学部国語国文学研究室 [金水敏・田窪行則編 (1992) 『(日本語研究資料集) 指示詞』, pp. 38-46. ひつじ書房 所収]
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエーネットワーク
- 陳海濤 (2015) 「ア系文脈指示詞と聞き手の存在認知に関する研究」『芸術工学研究』24, pp. 1-12. 九州大学大学院芸術工学研究院
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 森塚千絵 (2003) 「日本語の指示詞コソアとその習得研究の概観」『言語文化と日本語教育』2003年11月増刊特集号, pp. 51-76. 日本言語文化学会

キーワード：指示詞、現場指示、「コソア」、許容度、選択率

摘要

日语现场指示词「この」「その」「あの」的选择性问题(1)
——基于容许度与选择比例的视点——

杉村 泰

本文基于容许度和选择比例的视点,通过三选一测试、正误判断测试和多选测试三种方式,对日语中表示现场指示的「この」「その」「あの」的选择性问题进行了考察与论述。每种测试有32题,题目的形式为AB对话,如例(1)、例(2)。本文针对每种测试中的10道题进行了分析与考察。

(1) [上空を飛んでいる鳥を見て]

A:(この、その、あの)鳥の名前は何ですか?

B:(この、その、あの)鳥の名前はコンドルです。

(2) [相手の持っているバッグを見て]

A:(この、その、あの)バッグはどこで買ったんですか?

B:(この、その、あの)バッグはイタリアで買いました。

根据此次调查,不仅可以厘清说话人自身的容许度(内心接受程度)与选择比例(实际选择的结果)之间的关系,还可以根据说话人与听话人及指代物之间的关系将发话状况分为融合型与对立型两种模式。

关键词:指示词,现场指示,「コソア」,容许度,选择比例